

# 町村週報

(町村の購読料は会費)  
の中に含まれております)

## 2952号

毎週月曜日発行

発行所 全国町村会 〒100-0014 東京都千代田区永田町1丁目11番35号：電話03-3581-0486 FAX03-3580-5955

発行人 石田直裕：定価1部40円・年間1,500円(税、送料含む) 振替口座00110-8-47697

<http://www.zck.or.jp>

春間近 (北海道音更町のシマフクロウ)



も く じ

随  
想

地方創生に思う……

高知県中土佐町長

池田

洋光：(11)

情  
報

町村ご当地キャラじまん……

(9)

フ  
ォ  
ー  
ラ  
ム

幸村を観光の新たな柱に！町民とともに日本一元気な町を目指して！和歌山県九度山町……

(5)

政  
策

地方創生の拠点となる「道の駅」を選定！平成27年度は38箇所が選ばれ……

(2)

### コラム

## 電 報

読売新聞東京本社論説委員  
コラム『編集手帳』執筆者

竹内 政明  
たけうち まさあき

一年浪人して遠方の大学に入った。はるか昔の話である。インターネットはまだない。合格発表を見に出かけるのでは金がかかる。電報を頼んだ。当時は遠隔地から訪れた受験生のために、在校生がアルバイトで電報を受け付けていた。住所と受験番号を伝えて幾らか支払うと、合否を教えてください。二年つづけて同じ大学を受けたので電報も二本もらった。文面はいまも記憶している。

一年目(ボブラ並木雪深し、再起を祈る)。  
二年目(ヘクラークほほ笑む)。

二本目の電報を見て、いささが大仰に言えば悟得したことがあった。一年目より電文が短い。字数は半分以下である。そうか、幸せな人には事実だけを伝えればいい。不幸な人には、それでは足りない。「再起を祈る」のひと言を添える。言葉とはそのように使うものなのか、と。一本目と二本目は同一人物が書いたわけではないので、文面を比較しても本当は意味がない。独り合点の悟得ではあるのだが、そこは多感な年頃である。世の中を生きていく秘密の作

法を教わったかのように胸が波立ったのを覚えている。

のちに新聞のコラムを書くようになって、時どき思う。どうやら二本の電報は知らず知らずのうちに、わが血肉になっただけ。というのにはコラムの題材を選ぶとき、とくに自覚もせず勝者ではなく敗者を、日なたに居る人ではなく日陰に居る人を選んでいたのである。

例えばバンクーバー冬季五輪の男子フィギュアスケートでは、日本人男子として初のメダルに輝いた高橋大輔選手ではなく、演技中に靴のひもが切れた失意の織田信成選手を取り上げた。大相撲の場合は同じ日に引退を表明した力士のうち、人気抜群の高見盛爾ではなく、けがにたたられつつも努力家ながら地味な印象の武州山関を取り上げた。ただのヘソ曲がりといわれれば抗弁するつもりもないが、無意識のうちに「再起を祈る」のひと言を添えていたのかもしれない。

巣立ちの春である。多感な若い人が一生ものの言葉に出会えたらいい。

### 写真募集

表紙に掲載する写真を募集しています。採用者には、図書カード(3千円)を差し上げます。写真には撮影者の住所、氏名及び撮影場所・日時を明記して下さい。なお、採否は当方に一任願います。送り先：全国町村会・広報部